

季刊 連句 第13号



つつじの柱 (南柏雑記11) .....	1
俳諧資料の湮滅とその保存.....東 明 雅.....	2
井草麦雅.....杉 内 徒 司.....	4
連句の読み方・味わい方 (田(完)).....東 明 雅.....	6
—「木のもとに」の巻—	
二十韻 春や昔.....東 明 雅.....	9
吉野紀行.....秋 元 正 江.....	10
吉野にて(脇起り)行く春 葛葉子.....秋 元 正 江 捌	
櫻千本 原田千町捌 賦吉野二十韻 みよし野や 鶯	
堅香子と櫻.....東 明雅・下鉢清子.....	14
かたくりや(膝送り) 広池の花.....式田和子捌	
なんじゃもんじゃ...中田あかり捌  かたかごや...下鉢清子捌	
(第3回) 沙羅の会 春の街.....馬場彬風  春の雪.....馬場東夷.....	16
吉野の会 下蒔  連翹.....	18
絶頂の城  付勝練習歌仙.....	21
岡野ひさの歓迎連句興行.....井 手 樺 晴.....	23
第17回猫蓑会 五歌仙.....	24
松の花.....上月淳子  四月盡.....米谷貞子  桜薬.....内田麻子	
弥生尽.....吉沢てるよ  紫木蓮.....速水昌子	
柏連句会.....	27
藤 の 花.....下鉢清子  穀  雨.....井手樺晴	
連句教室.....	28
落 の 姑.....東 明雅  乞 食 葱.....福井隆秀	
句集「イカルス夢」(筆洗・東京新聞 61.4.20より).....	7
連句会案内.....29  雁帛往来.....29	

表 紙 (柴犬) 宮 崎 龍火子

つつじの柱

南 柏 雑 記 11

雅

猫蓑有志十三名が吉野の蔵王堂に着いたのは、四月十五日の昼前、朝からの小雨が降り続いてきた。既に行かれた方はとくと御存知であるが、太平記だけでしか知らなかった私には、蔵王堂は思ったよりも宏壮で堂々たる建物であった。堂の前には「大塔宮御陣地跡」という石柱が建つて、広庭かこむ四本の桜が八分咲き、元弘(一一三三)の乱を偲ばせる舞台はこれで十分というものであろう。ここは修験道の根本道場であるだけに、凡人には分からぬことが多い。折から石段を上って来た神官らしい人に、まず脳天大神と書いてある碑のいわれについて尋ねたところ、この人は神官ではないが、観光シーズンになると伊勢から案内の応援に来る人だったので、我々を堂の中までつれて行って丁寧に説明してくれた。ここで驚いたのが、標題にかかげたつつじの柱で、説明によると周囲二・八米、高さ十米あまりで、他の六十四本の大柱とともに、奈良の大仏殿

に襲ぐ大伽藍と言われるこの蔵王堂を支えているのだ。何処の山中にこんな大きなつつじがあったのか、そして、どんな因縁で、この柱になったのか、皆も不思議そうな顔をして、撫でてみるのだが、何かつるつるした感触(これはきっと多くの人が撫でるので自ら掌の脂がついたものだろう)で、是がつつじだという証拠はどこにもなかった。それから国宝の仁王門も仁王も豪壮ですばらしかった。この仁王門を見たのもさきの伊勢の案内人の注意によるところ、まことに吉野というところは花の美しさはもちろんであるが、何か妖しい古代の日本の亡霊がまだまだ残っている感じがする。ところで、この文の初めに書いた脳天大神だが、御本体は蛇で、首から上、頭の病はすべて残して下さるそうで、その案内の人も左の薬指に銀の蛇の指輪をはめていた。効験あらたかだそうだから、ぜひ一つ欲しかったが、売っている所が分からず、脳天大神の宮は石段を四百段おりはるか下の溪間にあるというので、参詣するのにもあきらめざるを得なかった。脳天バアの私にとってかえすがえすも残念なことであった。

# 俳諧資料の湮滅とその保存

東 明雅

俳諧（連句）は芭蕉の時代から数えても約三百年経過している。明治の頃までは愛好者もかなり多く、一族に有名な俳諧師が居れば、家族、親戚はこれを誇りにして、彼の書いた著書・伝書の類、短冊・色紙から書簡などの断簡零墨にいたるまで大切に保存し、散佚させるようなことはなかった。

しかし、近頃では俳諧（連句）そのものの権威とそれに対する認識が殊の外欠除して来て、せっかく、自分の父祖の心血をこめた作品も記念となる書簡類も、全く価値を認めず、粗末にされているのが実状である。これは時代意識の変化、文学に対する認識の変化によるものが多いだろう。

俳句も俳諧（連句）も分からぬ人に取っては、見も知らぬ先祖の書き残したものは全く反故同然であり、ことに都会では住宅事情も窮屈になって、よし、分かっているも保存することが不可能な場合も多いに違いない。蔵の隅で風の巣となったり、ひどいのは塵紙交換に出されたりするものも多いのではないか。

私は五・六年前に高崎の女子短大に教えに行つたことがある。高崎には根津声丈先生の俳友として著名な方があつた。

をされなければ、神戸春雄という人物は永久に連句の一頁から消え、我々も彼の生涯と俳諧を知る機会を失つたであろうと考えると恐しい気がする。高仲さんは五十八年三月にも「俳諧連句集」（中央公論事業出版）という神戸春雄の作品集を出版頒布された。地下の神戸春雄は嘸かしよるこんでいることであろう。

このところ「連句辞典」という本（東京堂）の原稿を書いていると、かなり著名な俳諧師でも、その略歴すら分からぬことがあり、また思いがけないところに、思いがけない俳諧師の資料の存在を知ることがあって、落胆したり、嬉しかったり、貴重な経験をした。その辞典原稿締切後に、作業の助手をつとめてくれた宮脇真彦氏から、次のような原稿が届いた。

森田友昇（もりた とものぼる）天保五年（一八三四）三月十六日、森田与八の二男として武蔵国福生村（現、東京都福生市）に生まれる。本名森田太四郎。嘯月庵と号した（『横浜地名案内』）。友昇は、はじめ在村の俳人、福泉舎友甫に俳諧の手ほどきをうけ、後に江戸の宗匠・富所西馬に入門して俳諧の修業をつんだ。その後、横浜に居を移し、明治八年（一八七五）、『横浜地名案内』を著している。明治十二年、友昇四十六歳の時に、榎本星布尼から三世榎本井之へと受け継がれてきた松原庵の四世を嗣いだ。同年晩秋に版行された『浅川集』はその折の記念撰集である。本書は横浜の儒者・平塚梅花、女流文人画家・奥原晴子がそれぞれ

たので、私はその御子孫の方に電話をかけた。しかし、その返事は全くつれないもので、

「確かに親父は連句に熱心でした。しかし、私は何の興味もない。それで一切の資料は処分してしまつて、今お見せするものは何もない」。

私は落胆すると共に、その人に対する憤りを禁じ得なかつた。

これと全く反対なのが高仲静美さんの場合である。高仲さんは四十年前になくなられたお祖父さんの俳諧資料を郷里で見つけ、難解な字を一つ一つ解説して、昭和五十六年十二月、「中央公論事業出版」から、「紅葉日記」として出版された。私もその一本をいただき、読んで行くうちに、そのころの俳諧師の生活の実体が生き生きと描かれてくるのを知つて大変うれしく、「季刊連句」四号・五号に「俳諧師―その心と生活」という文章を書いたことがあつたが、それは高仲さんのお祖父さんたる神戸春雄が信州植科郡を出て、大正三年十月からその年の大晦日まで中部地方を行脚して艱難辛苦をなめた有様が、こと細かに書かれ、感銘したからである。もし、高仲さんがそのような事

序・跋を寄せており、友昇の交際範囲の広さを窺うことができる。明治二十七年（一八九四）友昇は行脚の途につきたまま客死した。享年六十一歳。

私はまだこの人の作品は読んでいないが、松原庵を嗣ぐほどの人なら大したものであろう。松原庵は白井鳥醉（明和六年没・一七六九）を祖とする名庵で、二世の星布尼は女流俳人として卓越した人であり、白雄にもついている。彼女は文化十一年（一八一四）八十三歳で没した。

森田家には夥だしい祖先の蔵書や短冊等が所蔵され、成城大学教授尾形叡氏により調査が行なわれ、宮脇氏はそのお手伝をしたのであつたが、その仮目録を見てもその数量の多さに驚かされる。やがて公共図書館に寄贈されるそうであるが、この地方の一大文化遺産となることは間違いない。

由来、三多摩地方には俳諧師が多かつた。私の師根津芦丈翁の俳友であつた井草麦雅氏もこの友昇の門人で、芦丈著の『この一路』には麦雅氏と巻いた歌仙が何巻がおさめてある。この麦雅氏も昭和三十七年一月に没した。芦丈翁は悲痛な追悼文を『山襖』二号に書いている。

「麦雅翁、梨花女とも一月二十二日死去廿四日葬送す。と坂本素若氏よりの悲報に驚く。麦雅翁は半身不随の身にて、同庵に先立たれ淋しき数年であられた。云々」と続くその文章には、芦丈翁が心友麦雅氏を憶り真情が吐露されて、読む人の心をうつ、芦丈翁は常陸の成島梅路氏を相手

に戦時中、十百韻を作っておられ、その往復の途次、必ず八王子の麦雅氏の所に一宿されたのであった。そう言えば、この麦雅氏は都心連句会のメンバーになっておられたので私もたびたび御一座した。温和な、しかし連句は達者な御老人だったが、その方が麦雅氏の弟子であり、さらにたどれば森田友昇の孫弟子になることは、つい最近、宮脇、杉内の両氏により聞いて、人の世の広くて狭いことを痛感した次第であった。またさらに、麦雅氏の計を芦丈に知らせた坂本素若氏も五乳人の何世かにあたったり、十余年前、私は杉内氏に連れられて、その家をお訪ねしたことがあった。素若老はその時病臥しておられ、奥さんが看病されていた。間もなく没くなられたが、そのあとはどうなっていたことだろう。奥さんはとても俳諧に興味をもたれる方ではないように思われたので、素若老の蔵書などもすべて散佚してしまっているに違いない。こうして明治以来の俳諧師が一人没する度に、貴重な俳諧資料が闇に消えて行くの

## 井草麦雅

杉内 徒可

八王子の寒香園井草麦雅は大正、昭和にかけて全国的に知られた連句人である。八王子市の戦災に全作品は烏有に帰し、今日まとまっておられるものは僅かに喜寿祝に第一

私は麦雅の連句が知りたくて、八王子市追分の大きなそばやさんに常吉氏を訪ねたのは昭和四五年八月一日だった。お前は俺のように連句をやってはいかんと云われましてので連句の事は何もわかりません」と常吉氏は云う。常吉氏も麦雅について店を持ったが、本業一筋に打込んだので今は立派なそば屋さんになっている。麦雅の当利家はふ

### 虫 沈

高原のコ罗纳の下の虫沈む  
 ひよろ／＼草も月前の色  
 露臭き石鎌拾はん人借りて  
 咽喉うるほす水筒の酒  
 エネルギーためるも翌の備へなり  
 風鎮ゆれてかほる松籟  
 智照尼は昔し蘇小の風炉手前  
 忍ぶ恋路を泣かれて聞く  
 ゆくりなく更ける地階の灯の洩れて  
 誰か敷き捨てし蓆一枚  
 魚籠浮く風の和らく歌もなし  
 蟬気棲見し幸を日記に  
 公用の恩典旅行花かけて  
 温泉の香流るゝ欄のエレジー  
 水源に慈悲心鳥の夢かすれ  
 折れて本意なきピッケルの嘴  
 月過ぎの北アは雪を待つばかり

井草麦雅 根津芦丈 成島梅路 吉岡梅游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游

は残念である。

三多摩地方は既に述べたように俳諧の盛なところであるが、東京の近郊だけに、その変化も殊更に急激である。森田友昇の場合は、その子孫に具眼の人があって助かったわけであるが、大部分は、この文の冒頭に書いた高崎の方のような人が多いに違いない。そのような場合、各市町村の公共図書館か、あるいは東京の俳句文学館あたりで引き取って整理していただけないものだろうか。俳句文学館の書庫にもぎっしりと俳書や俳誌がつまっている、余裕のないことは分かっている、無理は申せないが、しかし、考えてみると俳句のいわば祖である連句を無視しては、俳句の本質に迫ることは困難であろうし、文学の研究は段々、そちらの方へ進んで行っているように思われる。別に俳句文学館のみに限らないのであるが、あるいは俳句文学館と並んで連句文学館の必要性が生まれて来るかも知れない。その時、資料が無いでは済まされないから、今からその準備が必要であろう。

句集として昭和三十一年六月松原庵友昇居士社刊の『聲音』(B6判42頁)あるのみである。

麦雅は明治四年頃群馬県高崎に生る。本名仁藤治。村を出て八王子市内のそばやに奉公、やがて勤めた店が繁昌して人手が足らなくなると、故郷から働き者のいとこの小倉常吉を呼んで共に商売に励む。麦雅はのち独立して中央線浅川駅(現在の高尾駅)近くにそばや「当利家」を営む。

るわずやがて廃業してしまつたという。麦雅没年が三十七年一月という事もその時知つた。

その帰り道、聞きながら尋ね当てた当利家跡はスーパーマーケット「高尾ストア」になって客が立こんでいた。それから同じ月の廿六日麦雅の子息井草述郎氏を林野庁経理課に訪ね、宗匠帽を被つた麦雅の写真をみることに出来た。

桂は匂ふ露の雫りに  
 神嘗の祭りを修す簾晴れて  
 沓軽／＼と東道の衛士  
 笹につけてふる程の酒香も高く  
 砂金の光る多摩の初恋  
 愚かなる身は思ふ事多かりき  
 年の夜の鐘煩悩や消す  
 雲巖で先頭犬はエスキモー  
 隠れることも知らぬアザラシ  
 仮千本汐息き風に梳り  
 青瓦朱柱の亭に酔伏し  
 銀盆に等しき月を仰ぐ夜に  
 荷風の掲げし籠の良寒  
 杭と云ふ杭に鴉の川岸の秋  
 田圃こんなにいなさ荒せし  
 わたましに姫金神の曆繰る  
 よき陶も出ぬ薫に愛着  
 雨や風七日に足らぬ花なりき  
 舞ふ折鶴に注ぐ春光

丈 路 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游 丈 雅 路 雅 游

# 連句の読み方・味わい方(五)(完)

——「木のもとに」の巻——

東 明雅

唯四方なる草庵の露

碩 水

一貫の銭むつかしと返しけり

(現代語訳) 方丈の草庵に住むこの主は、人から受けた銭一貫文の喜捨さえも煩わしいと言って返してしまった。

(付心) 起情の句、前句は人情無しで、露の置いた草庵だから、その住人は無慾で恬淡な人物を思い付いた付け。

「草庵ヲ兼好ガ栖トミタル也。兼好或年頼阿法師ノ許ヨリ銭借シコトアリ。カ、ル面影ニナシタルナリ」(晚台)の故事を念頭にした俳の付けでもある。人情自、あるいは自他半とも見られる。

(付味) 中世の草庵に住む人たちの清らかな気持が、前句の露と移り合っている。

(補説) 打越は人情無しの句で尾花が原の風景のみであったが、この句で人間が登場したので一応の転じは付いている。しかし、この偏屈な隠者氣質は、27・28の句において

て連想される人物とやや似ている点が気にかかる。この兼好と頼阿の故事は、頼阿の「続草庵集」にあり、兼好が「よもすゝしねざめのかりはたまくらもまそでも秋にへだてなきかぜ」と詠み、「よねたまへ、ぜにもほし」の詞を沓冠の折句としたところ、頼阿が「よるもうしねたくわがせこはてはこずなほざりにだにしばしとひませ(よねはなし、ぜにすこし)」と返したというのである。内容はいささかこの句の場合と異なるが、曲水は草庵の語から「続草庵集」のこの逸話を思い付いたものである。さらに、頼阿が送った「ぜにすこし」を一貫位の銭なら仕方がないと兼好が返してしまったと解することもできるが、そこまで穿鑿しないでもよい。因みに一貫は銭一十文。大した金額ではない。

一貫の銭むつかしと返しけり

医者の薬は飲まぬ分別

水 翁

(現代語訳) 人からの援助は煩わしいと一貫文の銭は返した自分だ。病気になるっても医者の薬など飲む気はないのだから。

(付心) 其人の付け。人情自の句。

(付味) 前句のいさぎよい内容、表現に対して、付句の内容・表現ともにびしりと言いつつ、いわゆる響きの付けである。

(補説) 草庵の雰囲気が打越から三句続くとも見えるが、この薬を飲まぬ人は世捨人とは限らぬから、その難はのがれるであろう。この句も兼好の俳(彼が伊賀国田井の庄の草庵で病気になる勅によって典薬が派遣されたが、これを受けなかったという故事が園太磨にあるとされてい

る)と見る説もあるが、それでは全く三句の転じがないことになる。

医者の薬は飲まぬ分別

花咲けば芳野あたりを欠廻り

水 翁

(現代語訳) 健康な体に医者の薬は不用と心に決め、花が咲くとじっとしてはおられず吉野あたりをかけまわるのである。

(付心) 其人の付け。人情自の句。春の句。

(付味) 前句の医者の薬を飲まぬ人を元氣一ぱいの人と見立替えて、芳野山中を駆けまわる健脚の人としたのは、近すぎる位よく付いている。

(補説) 打越が隠者で偏屈な人であるのに対して、これ

「イカルスの夢」・東京新聞

木々の芽に雫のひかりかかりけり。これはドイツの俳人ギュンター・クリンゲの作。▼クリンゲ氏(七十五歳)はハイクを書き始めて十八年、一日も欠かさず朝昼夕と最低三句は詠むという。前掲の句は最近、永田書房から出版された第五句集『イカルスの夢』所収の一七〇句の一つ。訳者は加藤慶二・筑波大学助教授(独文学)▼彼は三行十七音節に必ず「季語」を入れ、日本の俳句に近いハイクを作っている。数年前からミューン(ン)に「ハイク事務所」を構え、現在、

虚子編『新歳時記』を基にドイツ語版

『歳時記』の編さんに当たっており、一

九八一年に西ドイツ政府から文化交流の功労者として連邦功労十字章一等を受けている▼翻訳されたハイク、あるいは外国語で書かれた短詩型ハイクはもはや俳句ではない、などといわれる。確かに俳句の交流には自然、風土、言語、文化の相違が大きな壁になっている。が、その壁を乗り越えて、近年、米英独仏その他の諸外国でハイクが盛んに愛好されている▼たとえ外国作家の作品が俳句とは別のハイクであるにせよ、俳句が外国で多

様に変容しながら新しい三行詩を生み出しているのはまことに喜ばしいことだ。

クリンゲ氏が句集のあとがきで「ハイクが私の新しい生活のリズムとなっている」と言うように、案外深いところで文化交流の火花がとび交っているのかもしれない▼俳句について正しい理解を促すために作品の外国語訳や基本的な手引書を出版して外国の求めに応ずることが必要だ。この国際化、情報化の時代に「外人にはしゅせん、俳句はわからない」などと独善的、消極的な態度をとることがあってはなるまい。筆洗61・4・20より

は人一倍元気で賑かなまた華やかなことの好きそうな人柄を偲ばせる。前句を中にして自ら静と動、陰と陽の転じが鮮やかである。

これまでの句順をここでかえたのはすでに珍碩は初折の花を詠んでいるからで、これまで名残の表の月一句しか景物を詠んでいない曲水に譲ったのは当然である。

花咲けば芳野あたりを欠廻り

水 碩

（現代語訳）花が咲くと芳野のあたりをかけまわり、山の中で蛇に刺されたことであつた。

（付心）其人。人情自の句。春の句

（付味）「欠廻り」という言葉のもつ野卑だが瓢箪な響きに、「蛇にさゝるゝ」はおかしみのともなつた位の付けである。

（補説）同じ人情自の句が三句、33も自の句とすると四句並んでいるが、この句は特に軽く、おかしみがあつて転じが利いている。この一卷、ことに前半が古典味が、強い

ため、この挙句の軽み、ユーモアがとてもよく利いている。この一卷を通観するに、表六句は発句の花見の賑やかさが脇句で一層騒蕩たる気分となり、晩春の長閑さが溢れている。それが第三で一転して、虱を掻きながら歩く旅人の憂鬱さと変わり、その気分が、鞆（暮の肌）の気持悪さに通っている。第五の月の句は丈高く折端は俗にくだだけ、序の段として温和しい中にも調和あり変化あつてよい表ぶりである。

## 春や昔

東 明雅捌

春や昔十五万石の城下かな

子規居士

路面電車にまよふ芽柳

良美

隣より小鮎の籠の届き来て

子

湯煙りの中子を洗ひをり

秋

地鎮祭ほろ酔ひのあと月澄める

依

眠られぬまま虫の声きき

依

林檎の香セブンティーンの恋に似し

和

コートにはずむ彼のラケット

依

母の日の母の真白き割烹着

美

のつそりとゆく車屋の黒

秋

厄払ひ四辻うしろふり向かず

律

嘆洩やまぬ冬月

和

大空にハレー彗星観覧車

秋

すねて逃した男口惜しい

和

耳元でお手をどうぞと囁かれ

美

餌さへやれば寄つてくる鳩

秋

物置の棚のつくろひ老一人

律

先行き不安保険増額

依

花よりも坊つちゃん団子頬ばりて

美

臍に育つていれぎの里

雅

昭和六十一年三月二十三日

於 松山子規記念館

裏に入ると、裏移りの三歳駒の凜々しさが、一転して雨の物憂さとなり、入込の温泉の雑沓から、恐ろしい山伏を出すなど、前句に調和しながら、打越からは一転する妙が尽くされ、それが恋句となつて、物喰えと言われる町人の娘の態が、月見の船の景色と変わり、秋風の波の音の恐しさから、白子若松という調子のよい気分のよい地名に一転して、秋から春への季移りが見事に、「千部読む花の盛りの一身体」という釈教と花を結んだ名句となり、ついで「巡礼死ぬる道のかげろふ」の無常となる。このあたりのおもしろさはまさに絶妙で、神品といふべきものだろう。破の二段の折立は「何よりも蝶の現ぞあはれなる」と、ロマンチックな幻想は、まるで現代詩の一篇を見る思いである。それから、王朝的な恋となつて、裏の恋との変化を持たせ、紀の関守を出して劇的な効果を出した。それからのはげ頭でユーモアを出し、双六の目から憎まれてまでは俗な調子が続くが、この辺りはもう、急の段を意識してのこととであろうか。名残の裏から草庵に住む人、そしてその情が写され、一転して医者薬も飲まぬ達者な男が吉野の花を訪ねて、蛇に刺される軽みと滑稽で一卷が終る。序・破一段・破二段・急の四段階と見れば、序・破一段は完璧であり、破二段でやや渋滞と重複を感じるが、急ではまた見事に巻き納めている。名残の表にすこしごたごたした人情句が続いている外は、すばらしく古典的で典雅であるとともに、卑俗な軽みも十分盛りこんだ、芭蕉の作品の中でも、有数の傑作と言ふべきであろう。

東 明雅

連句懇話会四国大会の主催者鈴木香山洞さんから、鄭重なる御案内を受けたので、三月二十三日羽田九時五〇分発の飛行機で十一時すぎ松山到着。途中で食事をとり、十二時半子規記念館に到着。香山洞氏に挨拶。何しろ松山は連句もメッカで参加百九十余人にはおどろいた。二十余席の一つで脇起り「二十韻」。四時ごろ終つて、空港に行ったら、東京は雪で欠航。急遽大阪に廻り、東京駅についたのは翌日午前五時であった。同行された式田さんは一泊されたら、次の日は快晴だったそう、人間は平素の所行が大切なことを痛感した。しかし、帰りの同行はわだとしおさんと、また「二十韻」をやりこれも結構楽しかった。香山洞さん、お世話になりました。

吉野紀行

秋元正江

新幹線が八時三〇分にすべり出すと席の前と後から発句がまわり二十韻がはじまる。

橿原神宮乗り換えで、下市口駅に着くと、「いがみの権太の墓」がこの付近にあるとのこと、はや義経千本桜の世界に入りこんだようだ。今宵の宿、竹林院群芳園に旅の荷をおろし、バスで金峯神社へ、杉木立の日矢の中をつづれ折りに登る。途中すれ違う車にのせた吉野杉の切口は鮮やかで地に触るる迄にのせている。我々が名付けた跳ねバスは天井の所々にガラスをはめて桜が見られるようになっていたがまだそこ迄は桜がひらいていなかった。金峯神社で下車、靈験あらたかな聖地で黄金の埋蔵する補陀落浄土とのことである。とくとくの清水で、これよりの吉野紀行のわが耳を洗ひ口をすすぎて西行庵へ。岨道を歩くとやや平地

となり庵がある。この辺の奥千本は花は未だである。

宿に戻り夕食後の二十韻の捌きはアミダくじできめ、食膳には吉野葛のくず切り鍋、吉野の鮎、ゆば、筍、莫大海。この莫大海は千町さんに伺うと、中国四川省の柏樹の実を乾燥したものに戻したとのことである。二十韻は十一時に巻き終る。

子報通り朝からの小雨、水分神社へ朝食迄の予定で有志が出発、老杉の急坂の途中に小さな祠があり雨師観音である。夢違観音とも猿観音ともいうこと。郵便配達のパイクの人の槍笠が印象的。

途中ふりかえると山々は、大和絵さながら、又墨絵のたらしこみのようでもあり、近景に桜、きぶし、しだれ梅、その間を緑の濃淡が埋めてここから見る吉野の町はビルも花に囲まれて調和を破っていない。横川覚範の首塚を背にシャッターをきる。水分神社の楼門は修理中、水分は水を分配する神からみくぼり、みくまり、こもり(子守)となり安産

の神となった。本居宣長は子守神社によって授かったとのことである。

要害の地であり、馬の背のような町並に軒をつらねているのは、吉野建といわれる崖造りである。一、二階が道より下にかけ出されており、三階が普通の平屋と同じかたちなのである。水分神社の神主さんのお宅の電話をかりることになり、玄関を開けておとなうと、奥様が洗濯物をかかえて崖下の一階から戸を開けたまま上ってこられた。その戸口が花明りして、丁度花の中から現われたようだった。

朝食後、出発前にあわただしく天皇の泊られた部屋を見学、枝垂桜、山桜の古木の回廊からの眺めはさすがすばらしく、泊り客はすでに発つた後で、檜の風呂からは湯気があわあわと花に消えていった。車に分乗して、蔵王堂、吉水神社、勝手神社、如意輪堂へと廻る。一休庵にて昼食。昼食のあいまに二十韻一卷。三時一〇分吉野発の近鉄で帰京の途に。京都からの新幹線で又二十韻。

脇起り 二十韻 吉野にて

吉野にて桜見せうぞ松の木笠  
心浮き立つ風光る駅  
めかり時魚拓作りにせい出して  
棚に並びし古文書の筐  
軒先の新品バイク照らす月  
藪風とる背に近づき  
痴話喧嘩意地を通せばうそ寒く  
在日ながき神父着ながし  
飼主によく似た犬はあご長く  
いづれのおおん時の話ぞ  
孝行の言葉通じぬ新人類  
ピートのきいたエアロビックス  
乾杯のビール溢るゝ大ジョッキ  
寒月に付つあれば雪女郎  
唇は熱くそれより覚へなし  
マラカニアンを出でて放浪  
奥州は白石といふ国所  
名工つくるお湯にとつぶり  
わが魂のあくがれ出でて花の山  
鶯鳴いて暮るる一日  
昭和六十一年四月十四日  
吉野に向う車中にて膝送り

徒翁 隆秀 杉亭 千町 孝子 正江 麻子 和子 淳子 貞子 明子 秀司 哲亭 孝町

二十韻 行く春

行く春やすでに心は花吉野  
新幹線は東風よりも疾く  
潮干潟貝とる人の声のして  
藍くつぎりと描くキャンパス  
黙礼をくり返しつつ帰る月  
名残の蚊帳に二人寝しこと  
かりん酒を作る頃なり巴里に来て  
頬すりよせし馬のたてがみ  
名舞台つとめて余暇に名句あり  
鉄砲仕掛の葱鮪鍋など  
竹垣を時折ならず北ならひ  
高層ビルの窓に書く文  
わけありのパーのマダムの訪ね来て  
いづれを見ても過疎地育ちよ  
乗りかへて又乗りかへて月暑し  
ステンドグラス火蛾の舞ひ飛ぶ  
間延びして音が鳴り出す蓄音機  
灰吹きたゞき爺の念仏  
鏡割る落成式に散るさくら  
うらゝになびく先達の旗  
昭和六十一年四月十四日  
吉野に向う車中にて膝送り

徒翁 明雅 貞子 和子 淳子 麻子 正江 孝子 千町 杉亭 隆秀 秀司 哲亭 麻亭

二十韻 葛菓子

葛菓子の店にしるやま桜かな

訛のどかにバスの券売り

春の蠅抜れた足を投げ出して

違ひ棚には到来の壺

お月さんさへ寝やしゃんしたとお里さん

青無花果に似たる恋あり

竜神の裔の部落の懸煙草

傘一本で追ひ出さる僧

エスカルゴ銀のフォークでお品よく

クスンクスンとなつく野良犬

浅草は朝顔市のこの暑さ

酔うたついでにごねる暮仇

パソコンでテクノストレス重症に

ショーツ洗つて男三十

新幹線玻璃にくちづけ凍つる月

未来永劫今を抱きしめ

漸くに元氣恢復紫電改

パサリとはねて鯉の顔出し

つくづくと銭に無縁の素花見

木の間がくれにゆるするふらここ

昭和六十一年四月十四日

於吉野竹林院群芳園

正江

孝子

明雅

杉亭

和子

貞子

淳子

孝子

雅和

貞子

淳雅

貞子

亭貞

亭和

亭和

二十韻 桜千本

千本の桜尋ねて旅の宿

此処かしこ聞く谷の鶯

レセブション春着の人の軽やかに

莫大海を添へしお刺身

月光に定紋入りの棟瓦

ばった踏んでも気も付かぬキス

コスモスは風に乱れて破戒僧

南朝廷の夢追ひしあと

ゆらゆらとうーばあるーばあ泳ぐ水

ソフトクリーム自転車で売る

逃れ来し街騒遠く火蛾の舞ふ

髭を取つたり髭を付けたり

沙は沙君と見りやこそ波は波

シャガールの絵は愛に浮上す

鉄塔の尖りに氷輪汗ゆる時

咳込みながら直す遺言

サラリーを総て注ぎ込む猫屋敷

本吟醸酒棚に半分

花吹雪髪に項に背の子に

苑を巡りて惜春の詩

昭和六十一年四月十四日

於吉野竹林院群芳園

千町

隆秀

麻子

徒司

貞子

秀子

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀

賦吉野二十韻 みよし野や

みよし野や雨暖かく頬をうつ

杉の谷間に鶯の鳴く

わか鮎の小ぶりの皿に蓼添へて

座蒲団をふみ大部屋の客

月の夜に狐化かして蔵王堂

秋の静寂にひびく小鼓

うそ寒のはねバスに手を握り合ひ

葛菓手に文忍ばせて苞

今日はしも脳天大神段下り

あづさ弓あと雪の扉に

陀羅尼すけ売る店婆の集ひゐて

宿のゆかたはおひきずりなり

新幹線修学旅行の稚な顔

窓のガラスに映る口紅

八咫鳥地酒熱燭月あかり

竹林院の更けて行く宴

手漉紙忍ばせてゐる懐に

乙女十六慕ふ静は

水分に飾りのこせし花の輿

鶏関つぐる春の群峯

昭和六十一年四月十五日

於吉野一休庵

二十韻 鶯

鶯や水分の雨降りつる

蔀に近くゆるゝ芽柳

めかり時ランチボックス賜はりて

小学唱歌師弟合唱

月天心いささかの酔心地よく

茴香の実の笹にこぼるゝ

男猪しとめくくりて山下る

弁慶玉虫恋のはかなき

おみくじの通り待人あらはれて

信号交る街の十字路

文音に頭痛肩凝り按摩鍼

宮城館に今日も琴の音

羅を十六歳の乳透けて

ジャズもダンスもうれし夏月

ゆつくりとつむりゆるむはさびしかり

大鯨鯨は逆吊りなり

出迎へのベントウ黒タムシの罎

愛犬つれてジョギングの朝

ひとつとの花しだれ木を瓶に挿し

お手玉あそび子等のうらゝか

昭和六十一年四月十五日

東京に帰る車中にて膝送り

孝子

和子

麻子

貞子

正子

淳子

千子

隆子

杉亭

徒司

明雅

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀

子秀



かたくり

かたくりやあるかなきかの雨の粒  
 やや低く飛ぶ野辺の初蝶  
 さらこをゆする親子に犬の来て  
 晒し給きる音の軽やか  
 月まつる帝釈天の広縁に  
 茜の裾をかへす秋風  
 馬肥ゆる肥り肉なる彼を恋ひ  
 バチカンで賞つ最後の晚餐  
 裏切りの胸の痛みを抱きて生き  
 アイドル歌手の人氣短かし  
 翹透きてうすば蜉蝣灯に迷ひ  
 踊り疲れて汗だくの月  
 飯食つたらすぐに出るよと父が言ひ  
 天婦羅ひとつ譲りたる仲  
 ゆきずりの旅のひと夜を胸にひめ  
 アムステルダム塔のみぞるる  
 別珍の足袋はいて寝る老二人  
 健康法は気にしないこと  
 山の辺の花雪洞に足をとめ  
 ミニサンクチュアリ鶯の鳴く

ものふの八十娘子らが汲みまがふ寺井  
 の上の堅香子の花(万葉集卷十九、大伴  
 家持) (群をなすおとめが汲みさざめく、  
 寺井のほとりのかたかごの花よ)  
 堅香子の花はかたくりで、ゆり科の多年  
 草。四月中旬ごろ頂に紅紫色の花を下向き  
 につける。その鱗茎からはかたくり粉を採  
 る。  
 信州の山の中でも時々咲いているのを見  
 ることはあったが、千葉にその群生地が残  
 っていることは知らなかった。柏の逆井に  
 住むA・C・C仲間の下鉢清子さんの御案  
 内で、A・C・C有志で見にゆく。小雨の  
 ため満開とまでは行かなかったが、久しぶ  
 りに可憐なその姿に接しうれしかった。途  
 中ですぐ二十韻一巻。それから午後は同市  
 光ヶ丘のうどん屋さんで中食のあと、式田  
 和子さんのお世話で有名な広池学園の桜を  
 見、同学園会議室で土地の方を交えて四時  
 まで二十韻三席を興行した。 東 明雅

春特有の細い雨が降りみ降らずみ、それ  
 はそれなりの風情の中の四月十一日、朝日  
 カルチャー連句教室の方々、柏市内のか  
 たくりと桜を見にお出でになった。遠く筑  
 波大学からの加藤慶二先生のお顔もある。  
 柏駅に全員が揃うや否やもう始められた二  
 十韻の付け直し、明雅先生の発句は、  
 かたくりやあるかなきかの雨の粒  
 かたくりへの道、歩きながらも付け句を  
 考える熱の入れ様に、先ずは「かたくり」  
 の巻は昼食のうどん屋でめでたく満尾。

下鉢 清子

広池の花

式田和子捌

集ひ来て広池の花に会ひにけり 和子  
 土ほんのりと匂ふ春郊 千町  
 新調の合のコートを取り出して 杉亭  
 ロングサイズの煙草くはへる 英子  
 月待ちて詩歌管絃たけなはに 和子  
 籠に溢れる千草八千草 和子  
 独り酌む酒は名代の新走り 和子  
 シラノもどきに恋の手ほどき 和子  
 オニヤンコのうひうひしさが可愛らし 和子  
 路上にひたとつきし血痕 和子  
 那谷寺の面相歪む夏の旅 同  
 ほっと一息頼むコーヒー 同  
 振るチェッカ音瞬時走りすぎ 同  
 寒月背に尋ね来し女 同  
 厨辺に逃げつくなほす乱れ髪 同  
 虫の居処悪き此の頃 同  
 水車小屋はてなき苦役世はめぐる 同  
 入れ歯ない人噛めぬあたりめ 同  
 小手がさし仰ぎて見やる夕桜 同  
 鴨なき渡り霞む山々 同

なんじゃもんじゃ

中田あかり 捌

仰ぎみるなんじゃもんじゃの芽吹きかな 明雅  
 残る水に揺るる池の面 明雅  
 春暖灼北国の酒酌みあひて 明雅  
 古本市のカタログを読む 明雅  
 苗売りの店に客群れ細き月 明雅  
 からませてるる香水の腕 明雅  
 「Kiss」を「口づけ」と訳し笑はるる 明雅  
 留守番の猫鈴を鳴らしぬ 明雅  
 歌へ隔れ鱧魁魁の例会日 明雅  
 意気揚々と出向くサミット 明雅  
 寒行の明けたる背になほ粉雪 明雅  
 熱き葛湯に喉をうるほし 明雅  
 お連れさんお待ちどっせと嵯峨の宿 明雅  
 役者狂ひの呉服屋の後家 明雅  
 鯉の打つ水音はげし月の下 明雅  
 むいてすぐだすおもたせの柿 明雅  
 ベランダの子らにつつかれ放屁虫 明雅  
 雉鳴かぬ雨の校庭 明雅  
 花の山やや遠くして試歩の径 明雅  
 あをぬたを喰ふ屋ののどけさ 明雅

かたかごや

下鉢清子 捌

かたかごや葛飾野面との曇り 清子  
 苗札立てて苗植ある人 明雅  
 春蟬にみどりこのまだ熟睡して 正江  
 ボンボン時計急に鳴り出す ヒデ子  
 ハネムーン月光あまねく飛機たち 洋子  
 影もつれゆく聖堂の秋 清子  
 糸瓜水つけたる髪のややにのび 清子  
 紳のすはれる絹のお蒲団 清子  
 同病の相哀みて呆け二人 清子  
 酒は買ったかまだある筈だが 清子  
 女房は天下祭りの質に入れ 清子  
 下駄音ひびく赤富士の月 清子  
 季をもたぬ雀鳥は乞食鳥 清子  
 ビーフステーキ食えぬ円高 清子  
 一言の想ひを吐いて息白し 清子  
 随心院にきぬぎぬの願 清子  
 マドロスに港の雨の真珠色 清子  
 最後の勤め無事に納めし 清子  
 夕ざくら玻璃戸いっばい花に舞ふ 清子  
 めかる蛙のやはらかき声 清子



吉野の会

昭和六十一年三月十九日  
K・D・D吉野の間

下 萌

雨催ひ街樹の根かた下萌ゆる  
春の灯にじむ和菓子屋の玻璃  
若駒の瞳優しく寄りて来て  
時報をききつゼンマイを巻く  
鯉はねて月影乱る池の面  
背やや寒く轆轤蹴る人  
登山者のちらほらとなり牧閉す  
岐神にも酒を供へて  
捨てさりしとりどりの夢美しく  
ホテル火災で知れわたる仲  
釘つけ頬を寄せたる糸切齒  
ちよつと動けば猫の玩具に  
月もるる窓辺に移す金魚玉  
夏風邪の子のきける汐騒  
モテットのソプラノの声よく透り  
十字架に向け並ぶ木の椅子  
望郷の胸に花びらつくるなく  
鳴戸に近く若布干しある

弘 淳 孝 正

淳 弘 孝 淳 孝 弘 孝 淳 孝 雄 淳 弘 孝 淳 子 子 子 雄

連 翹

連翹のひと枝撥ねて肩に触れ  
卒業の子の群る、校庭  
重なりし遠嶺かすかに笑ひゐて  
八丁味噌の匂ふ大鍋  
金絲雀に餌をやる頃の宵の月  
トルソー並べ秋のアトリエ  
大方は母をまねびの冬用意  
双児美人の白粉の瓶  
受け口の人形妖しジュサブロウ  
いじめられたるあとのたかぶり  
丹念に中古の外車磨かれる  
葱に揺るる風鈴の音  
礼拝を終えて出づれば月涼し  
安らぎ得たりバーデンバーデン  
札束を奪ひてホシのひとつ飛び  
猫語で三毛に話しかけをり  
花衣ビーズ刺繍のきらきらと  
頬ふくらまししやぼん玉吹く

貞 瑞 遊

子 枝 子 子 遊 子 遊 同 子 枝 遊 同 子

落第の娘は毎日を昼寝して  
ジグソー・パズルに内中で凝り  
ひと揃ひ和蘭陀うつき向付  
病の如く通ふ露地裏  
愛つなぎ難くひたすら毛糸編む  
男と女肉枯るゝまで  
屋上に季節はづれの植木鉢  
ズーム・アップでマラソンを追ふ  
中流意識でみんながわかる金満症  
味噌汁ふなり月が出る頃  
老父のいそいそかむる踊笠  
鯛の中閉ざす詩の本  
ひよんの実を吹きつつ下る三の丸  
背広にみんな赤い羽根つけ  
おじさんの万年筆を欲しがりて  
なぞなぞ遊びつきつきと出す  
更くるほど花の明るさ研えて来し  
母衣を残して山鳥の消ゆ

執

筆 雄 弘 同 孝 淳 弘 淳 孝 雄 孝 淳 弘 淳 同 孝 淳 弘

雨隣留守を頼みて伊勢詣  
「暮六つ」と云ふ店でいつばい  
その男ぼそと食みをり豆落雁  
冬薔薇溢るマジョリカの壺  
青空に熱気球浮く綱とかれ  
誰も知らない誰も見てない  
子産み石抱きし御利益あらたかに  
キヨスクで買うアパマン情報  
往來に排気孔出て洋食屋  
父の背広を娘着くづし  
月あかりパフォーマンズのまっさかり  
力士幟の鮮やかな色  
御当地も今は名残の虫をきく  
ぼけの媼の達筆の反故  
お疲れにとつきワイン召上れ  
にぶく光りて銀の灰皿  
爛漫の花を映せる大玻璃戸  
土産に選ぶ榮螺 蛤

子 遊 子 子 枝 遊 枝 子 遊 子 遊 同 子

東 明 雅 著

連句入門  
芭蕉の恋句

中公新書 508号  
価 五〇〇円  
岩波新書 91号  
価 三二〇円

猫 蓑  
好色五人女  
好色一代女

永 田 書 房  
価 二 三 〇 〇 円  
小 学 館  
価 一 九 〇 〇 円

絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

投句締切  
7月20日

絶頂の城たのもしき若葉かな

夏鷲のこだまする溪

枕蚊帳熟睡の夢の安からん

暁る番茶に茶柱の立つ

抄らぬ稿にしらじら月さして

新聞少年やや寒の道

通草の実供へてありぬ岐神

嘘のキッスが本物となり

親が居て子が居て電話ままたならず

ぱりぱりと炒るちぎり菫蕪

角乗りを終へて筏師まづ一献

江悠々と冬霧の中

十三句目

治定 凍てる月ロシアの古都に妻とあり

1 月待つ間馳よぎるを確と見し

遊 哲

蕪村

正江

樺晴

東夷

隆秀

たかし

貞子

昌子

妙子

千町

杉亭

天留子

2 しばらくは寒柝に蹤く月の路地

狼と月の掛軸見て暮らす

わが手にて刺繍の服に寒の月

去年今年旅にしあれば仰ぐ月

炉を囲み姮娥のことも口の端に

異掛ける凍れる背に刺さる月

月明り吊り下げられし蝦夷鼯

暈月のパリー狐に顎うづめ

凍月を掴みとらんと猿の手

狩宿の高窓洩るゝ月明り

寒月も今日はうるみぬ葬終へて

枯枝に昼月淡くかかり居る

利鎌なす月に狐火また燃えて

ぼうと炎ゆ狐火の暈月の暈

撃鉄をおこし月下の貂を待つ

月暗し遠く吠ゆるは狼か

月の下裘着て巴里にあり

寒月下捕虜の時代を思ひ出す

凍鶴の一声鳴きしあとの月

ペーチカの烟の中を上る月

采女

清之

あかり

孝子

東夷

美子

和子

千町

杉亭

天留子

淳子

隆秀

みずゑ

美鈴

智子

美和

竹子

道郎

徹

前句の「江」という字は、どうみても日本の川にしては大きすぎ、やはり大陸の河である。治定の句はロシアとしているが、いかにも寒月の出る場所としても適当である。

ただ妻という字が恋句にならないかと心配したが、これは次の付句の付け方で恋句にならないようにすればよいのである。また、留め方が、菫蕪・一献・中と名詞が続いて来たから、恋化があつてよい。人情自他半の句である。ロシア

と言う地名が出て、また、世界が一転した。この先、どう変化させるかが腕のみせ所である。1の鼯、この巻には生類がすくなく、ことにまだ四足の動物が出ていなかった。

鼯がちよろちよろと過ぎるのは大河の茫漠たる景と対付的よいが、前句との付味がいかかか。3は大変苦勞された句である。打越と前句が外の景なので、何とか内に入ろうとされ、留め方にも注意しておられる。4は中国服の連想か。5は去年今年の感慨と前句と大自然の景が融合して、付味がともによいがやはり留め方が平凡であつた。6もよく考えてみると、冬の室内で中国風の月を出そうと苦心された様子がよく分かり、留め方も注意しておられる。7は異でやはり四足のイメーシを出してそれを中心に寒月のきびしさを出しておられる。ただ、打越が凝つた句であつたから、今度の付けはあまり凝らない方がむしろよかつたかも知れない。その点、8・9・10・11にも共通して言えるところである。8の鼯は同じ鼯でも外国的な気分をもつ蝦夷鼯で、それが獲られ、吊り下げられている点凄愴さがあ

る。9も旅・地名・四足・月を纏めて手際のよい所がある。10は中国の画題によくある猿猴が水の月を取ろうとする図から思いつかれたのだろう。こんなふざけた句も変化をつける上からはよい。11も打越と気分の変化があつてよいが、留めの工夫が今一步である。12これも景気のよい打越から無常の句へと気分・情景ともに一転しているが、留めの月はずでに表に出ているので取れなかつた。13これは純叙景の句で、さり気ない所がよい。14・15は期せずして狐火の句である。狐火はやはり日本的なものではないかと思うが、前句に付いていないことはない。ことに15は何か茫洋たる表現が、打越からはよく転じ、前句にはよく付いているように思うが、ともに留め方に一工夫ほしかつた。16はその点、留め方も考え、付味・転じともに悪くない。17は凄愴の気が強すぎて、大打越の気分に戻りはしないかと心配だが、よい句である。18は9と同じだが、9の方が凝っている。19は終戦の時の御苦勞を憶はれたもの、こんな付けもあつてよい。20凍鶴の声は脇の句の夏鷲の声があるのでまずいだらう。21こんな景もおもしろく、付味・転じも悪くないが、留め方にもう一工夫が欲しかつた。さて、次は雑の句。人情の句が欲しいが、恋句にしないよう注意して下さい。

